



天井空間を見渡す。天井空間は梁下で高さ約 1500mm となり、少し頭をかかめてくぐりながら移動することで空間の分節を感じ、場所性が生まれる。また、座った際には視線が抜け、町とのゆるやかなつながりが生まれる



西側前面道路から見る。これまで隠れていた天井空間が表出し、町並みに奥行きをつくり出している。



上に天井空間、下にリビングダイニングを見る。吹き抜け開口越しに天井空間から光と風が入る。屋根面、スラブ面、1F 床面でそれぞれ異なる材質を使用し、空間を特徴付けた。

House NI - 裏とオモテと境界 - 古き良きものと新しいものが補填し合うことで生まれる、新しいリノベーションタイプの提案

敷地は市街化調整区域にあり、周囲では開発が進んでいる。古いものが当たり前のように廃棄され、風景が塗り替えられていく中で、長時間そこにあったもの（小屋組み）が有する精神を最大化するような住宅のあり方を旨とした。具体的には、既存の木造平屋住宅がもつ1階・天井空間・境界（天井面）の関係性を読み替えた。既存住宅の軸組だけを残して部分解体した後、境界となる箇所の柱間に新設梁を挿入し、面を張る。構造的には、この水平構面により既存柱の座屈長さを短くすると同時に、中間階の地震力を外周部に伝達する耐震補強の機能をもつ。

天井空間は、新たな境界（床）と既存の屋根・梁組みの関係性によって成り立つ。そこに具体的な部屋名は無く、求められた床面積を満たすように柔軟に振舞うことが可能であり、1階では収まりきらない生活の補填を担う。また、四周を隣家屋根面で開口とすることで、光と風を1階へ届ける。過去に閉じられていた天井空間が、町との適度な距離感を生んでいる。

1階には、施主の要望であるプライバシーの保たれた個室を配置しており、内外のつながりや通風、採光等の観察によって、各室上部の境界（天井）に異なる大きさの開口を設けることで、1階の住環境を補填している。本プロジェクトでは、過去に裏だった天井空間をオモテに出すことで新たな定義を与えた。オモテとなった天井空間が、内部だけでなく、町並みにもゆるやかな関係性の変化を与える。



3人家族が生活する、旧耐震基準の築50年の木造平屋建住宅



部分解体：一度スケルトンにし、部材の確認と寸法調査



揚家をしながら、現行基準に合致する基礎を新設



建方：旧構造材を補強するように、新材を挿入する



現行基準を満たしながら、旧構造材を使用した住宅



寝室：既存の柱・梁を感じながら暮らす

